

2学年通信

新宮町立新宮東中学校

令和7年6月13日 第30号

文責:江頭 俊輔

[部活動関連では是非知ってほしい！]

さて、いよいよ明日から最後の大会となる中体連（中学校総合体育大会）の糟屋区大会が始まります。部活動によっては、この週で3年生が引退となってしまう部活動もあると思います。**3年生の姿を、勇姿を、東中としての矜持を3年生の姿から学び、新チームに引き継ぐことができる2年生であってほしい**と思っています。

さて、今回は、右の写真の人物についてご紹介したいと思います。記憶に新しい人も多いと思いますが、この方は、仙台育英高校の監督である「須江航」監督です。



仙台育英高校は3年前の第104回全国高校野球選手権大会で初優勝をし、【深紅の大優勝旗が「白河の関」を超えた】ことで話題となりました。（これまで100回を超える高校野球の歴史の中で、東北勢が優勝したことにはなかったので、東北の玄関口とされる「白河の関」を用いて、このように表現、報道されました。）

これは仙台育英高校の優勝監督インタビューの話です。私もこのインタビューをはじめは「ぼーっと」していましたが、徐々に号泣しながら聞いている自分がいて、自分でも驚いたのを覚えています。その場面は突然訪れました。

アナウンサー 「今年の3年生は入学した時から、新型コロナウイルスの感染に翻弄されてきました。それを乗り越えての優勝。3年生にどんな言葉をかけたいですか。」

須江監督

入学どころか、たぶんおそらく中学校の卒業式もちゃんとできなくて。高校生活っていうのは、僕たち大人が過ごしてきた高校生活とは全く違うんです。**青春って、すごく密なので。**でもそういうことは全部ダメだ、ダメだと言われて。活動しても、どこかでストップがかかって、どこかでいつも止まってしまうような苦しい中で。でも本当にあきらめないでやってくれたこと、でもそれをさせてくれたのは僕たちだけじゃなくて、全国の高校生のみんなが本当にやってくれて。

例えば、今日の下関国際さんもそうですけど、大阪桐蔭さんとか、そういう目標になるチームがあったから、どんなときでも、あきらめないで暗い中でも走っていけたので。本当に、すべての高校生の努力のたまものが、ただただ最後、僕たちがここに立ったというだけなので、**ぜひ全国の高校生に拍手してもらえたならな**と思います。

このインタビューは「青春って、すごく密なので。」という一言で有名になりました。私もこの一言にコロナ禍を経験した学生の気持ちが凝縮して代弁されていると感じました。

私は当時、中学3年生の担任として、体育会も中体連も、修学旅行も文化発表会もない学校生活をなんか中学生が青春を楽しむことができるようと考えながら職務に励んでいました。しかし、いろいろなどころで制限がかかり、ダメだダメだと言われ、いつもどこかで止まってしまう毎日でした。

ふと考へると、ポストコロナ時代として徐々に今までの生活に戻ってきているのが不思議に感じられる今日この頃です。ただ、「当たり前じゃないんだ」と言い聞かせながら生活できるようになりました。

最後に「全国の高校生への拍手を」と須江監督は言いました。全国の高校生のこれまでの苦労が少しだけ報われたように感じます。みなさんも3年生への大きな拍手を忘れず、最後の大会に挑んでください。